

電腦千句第五

賦青何連歌百韻

二〇一四年六月——二〇一五年七月

於 サイバースペース

初折表

ひらりき  
箏篋のゆるぐ音色や梅雨に入る

夢様

泉殿にはあはき人かげ

樂歳

集ふともなくかたがたの集ひ来て

千草

籠に鳴かせる鳥のめづらか

梢風

けふが日も森から森へたそがれぬ

蘭舎

ひとり静かに茶をたててるる

遊香

雲はらふ風のまのまの月の影

歳

閉せる門に萩のささやき

様

ふりむけば佛さやかに立ちたまふ

風

おん手の魚籠にいをのいろいろ

草

水の音たどる歩みのほそぼそと

香

我が恋ふるひと小野のわたりに

舎

ひつそりときぬぎぬすぎて眉を刷く

路花

結べど消ゆる庭の初霜

歳

冬の蝶物思ふがに静もれる

様

みやび忘れし鄙のいくとせ

羽衣

ゆくすゑもすぎにしかたも水のごと

草

起き直る日の山の紫

風

月をたゞ花のあはひに眺めんと

舎

里の宴に香る白酒

香

のどけくも民のかまどはけぶり立ち

歳

歌よみの文枕辺におき

花

永らふる命の涯の物狂ひ

衣

向へど忘へぬ鳥ぞ悲しき

梯

しみじみと山家に弦の響く夜

歳

梓弓はるもののふの影

草

流されし身にいくたびの雪ぞ降る

風

隠岐の水草を枯らすよこかぜ

舎

冬ごもりするものありや岩のうろ

香

訳さまざまに奥駈道を

歳

脚萎えの人に連れそふ童子ゐて

花

御衣の薰りゆかしくもあり

衣

訶梨勒のひも鮮かに真木柱

梯

しづのをだまきめぐりくる秋

歳

ため息に露けき袖を後の月

草

戻らぬ猫を思ふやや寒

風

絶え絶えに野寺の鐘のとはき道

舎

転ぶ小石のいつか止まりて

香

うつせみの浮名のはてのこけの塚

歳

京の出会ひを思ひ出づる日

花

ほととぎす夢のつづきの有りや無し

衣

文目もわかぬ雨のみぞ降る

梯

塞の神置かれし岸に波寄せて

如月

うかれめの手のいと細げなる

草

琵琶に依り睡れることのアまたたび

風

鄙にも月はしろう光りて

舎

蟋蟀のゑんりよながらにかはす声

香

よしなしごとを秋のつれづれ

歳

のどらかに頤の鬚すこし伸び

花

形見なるらむかの桜狩り

衣

醍醐なる仏の教へ清明に

梯

遙か御空にあふぐ塔

あららぎ

月

さびしさに呼べどつれなきみやこどり

草

にほひゆかしくひらく巻紙

風

逢ふことも今はかなはぬ君をこそ

舎

声をちこちに忘れやはする

香

睦言のよみがへりくるしののめに

歳

うつろふことを知らす冬霧

花

神無月つはもの一人逸れしむ

衣

国の境を越えて帰らず

梯

横笛の幽かにむせぶ築地うち

月

ししかくまかと老のしはぶき

草

しぐるれば如何にと翌のもみぢ狩

風

寝覚めがちなる奥山の秋

歳

事なしぶ髪をけづりて朝月夜

恋に浮かるるころは過ぎても

鄙なれば手向けの花も採しかね

首途をかざる鶯の声

たび人も愁ひも春の風のなか

いにしへ偲びめぐる八橋

さらはれていくかに空の白雲の

牛も来て飲むつくばひの水

あな尊とひかりこぼせる柿若葉

絵扇ごしに影をうかがひ

殿ばらが裾ひるがへす鞠の庭

三人集へばはしたなき声

思ふとも思ひのほかの通せん坊

頼みをかくるかささぎの羽

香

歳

花

衣

様

月

草

風

舎

香

歳

花

衣

様

後臥の髪つくよみにかがよへり

月

真葛が原の風しのびやか

草

いつよりか社に赤き領巾の鳴る

風

そばへに濡るゝ市のひとむら

舎

盃をさしあふ人のさらぬかほ

香

風ぐる海路に夏の日は落ち

歳

舳にていづこ眺むる白き鳥

花

生き死にあまた見やり過ぐして

衣

蓮の骨うつろふ時世かなしとぞ

様

しぐれ心地にあはき墨の香

月

しのばるるあまつをよめの駿河舞

草

挿頭<sup>かぶし</sup>は風のたはむれを知り

風

かけはしの上なる雲のたちはなれ

舎

山<sup>きざ</sup>なみだけは昨夜のごとくに

香

奥<sup>おく</sup>越<sup>か</sup>よりながれ落ちたる花の波

月

舟人去りし櫓にとまる蝶

衣

かげろふを追ひて夢へと誘はれ

草馬

戦なき星祈る月影

梯

故里は色鳥わたるところならん

舎

急ぐ旅路のこの秋の暮

歳

われも又をのこのすなるつらね歌

風

茶を点て語るほがらかなこゑ

香